Faculty Development INVITATION
山梨大学教育人間科学部
第32号
March.31.2015

2014年度　教育人間科学部FDフォーラム報告

現在、授業のあり方を考えなおすことを求められており、本学でも反転授業の実施など様々な試みが実践されております。このような状況において、2015年2月10日（火）13:30～15:00、J号館5階A会議室において2014年度教育人間科学部FDフォーラムが開催されました。今回は教育人間科学部の学生代表者と学部長との懇談会と合同開催となりました。お忙しい中ご参加いただきました学部生、大学院生、教職員の皆様に感謝申し上げます。

本年度のテーマは前年度に引き続き「学生と教員で作り上げる授業～大学教育のレベルアップのために～」とし、サブテーマとして以下のような話題を用意しました。

1. 初年次教育（学部入門ゼミ、新入生合宿研修）について
2. 学生の授業参加意欲と教員のやる気の相互作用について
3. 能動的学修（アクティブ・ラーニング）について
4. 大教室の授業と少人数授業について

学部入門ゼミついては教員の研究内容やどのように授業が進んでいくのか、コースの選択について理解ができるといった意見があり、学生が教員を目指すにあたっての大学におけるロードマップが学生に伝わっていると考えられます。新入生合宿研修については1年生の横のつながりができるが、学校教育課程向けの内容が中心で生涯学習課程向けの内容が少なかったとの意見がありました。

学生の授業参加意欲と教員のやる気の相互作用については学生から意欲的に取り組める授業のポイントが出され、1つは専門的な知識として明確に詳細な内容があるものでした。もう1つは理論と実践を結ぶものであり、教員になるため、または教育実習に行くために有効な理論が授業内容としてあるものでした。しかし、それが実際の実習と離れているものもあるとの意見がありました。授業のねらいが明確であること、単なる知識ではなくその知識に対して教員個人の意見などが表明されることが大事であり、それを聴いた学生自身がどのような立場にたつのか、自分の立ち位置が見えてくることにつながります。聴くだけでなく発言する機会や模擬授業、活動する参加型授業についても出されました。やる気がなかった授業で共通していたことは、教員が一人で進めていた授業や毎年内容が変わらない授業や、教員とPowerPointが話しているだけの授業で、教員の話を聞くよりもノートを書かないといけない授業が挙げられました。

能動的学修（アクティブ・ラーニング）については、他コースの学生やいろいろな考え方をする人との意見の共有の時間をとると自分の意見が深まる、教師が一方的に講義をするのではなくて、自分が考えてその意見を仲間と共有できる時間をとっていくと、それが能動的学修につながるとの意見がありました。自ら学習するための学生への動機付けが必要であると感じられました。

大教室の授業と少人数授業については、大教室での多人数授業では教員からの一方的な知識伝達になってしまい自ら進んで学習せず受け身になりやすい、その結果やる気をなくしてしまいがちになる、少人数授業は丁寧に指導を受けることができることで自ら予習を進めることもできる、さらには関連領域や応用・発展的内容を教員と進めることができるとの意見が挙げられました。

授業だけでなく、教育ボランティアやCNS、掲示板といった情報伝達手法についても話題となりました。経験から得られたことが自らの学習を発展させるきっかけになる、教員と学生の間の情報伝達を効果的に行うことで機会喪失を防ぐなど、1つの授業だけにとらわれない学習意欲向上に向けた幅広い話し合いが行われました。学生代表者と学部長との懇談会と合同開催による良さが感じられました。

FD委員会　山際　　基

附属学校での研修報告書

教育支援科学講座　吉井　勘人

平成26年9月4日に、初任者研修の一環として附属幼稚園に伺いました。前職の筑波大学附属大塚特別支援学校では、特別支援教育コーディネーターとして、ほぼ毎週、幼稚園で巡回相談を行っていたので、久しぶりに幼稚園の門をくぐり、園庭に響く子どもたちの明るい声と元気な姿を見て、嬉しく思いました。

登園の様子から、年少、年中、年長の各クラスを参観させて頂きました。子どもたちが、伸びやかに、友だちとよく話し合いながら積木遊びやトランプゲームをしている様子が印象的でした。一見すると、子どもたちだけで楽しそうに遊んでいるように見えましたが、その土壌には、子どもの内面を大切にする先生方の穏やかで温かいかかわり方、様々に工夫を凝らした環境設定があることが窺えました。

特に、印象に残っているのは、年長のクラスに飾ってあったカラスの羽です。「これは、何だろう？」と思い、副園長先生にたずねてみたところ、ある日、水道の石鹸が、何者かにかじられていたことに子どもが気づいたそうです。子どもたちは、これは、誰の仕業か？ツバメだろうか？などと皆で色々とアイデアを出して、考えました。そして、カラスの羽が現場近くに落ちていたことから、犯人がカラスであったことに気づいたとのことでした。その後、カラスについて図鑑で調べたりして、その羽を飾ったとのことでした。子どもの興味・関心を大人が汲み取り、様々な他者との対話を介して、学びを深めていく、特別支援教育との共通性を感じました。

いろいろと学ぶことの多い、充実した研修になりました。附属幼稚園の先生方には、観察だけでなく、園の方針や具体的な取り組みについて詳しく教えて頂きましたことに深く感謝申し上げます。また、このように非常に貴重な機会をくださいましたＦＤ委員会の先生方に心より感謝申し上げます。

言語文化教育講座　大木　志門

初任者研修の一環として、2014年10月24日に附属中学校に見学にうかがいました。私は埼玉県浦和市（現さいたま市）の公立中学校の出身ですが、当時は第二次ベビーブームのただ中で生徒が学校にあふれていました。もちろん今から振り返ると現場の先生方のご苦労は大変なものであったろうと思うのですが、多人数学級に受験競争や校内暴力と、お世辞にも快適な教育環境ではありませんでした。卒業して私立の高等学校に入学した時は心から安堵したものでした。

よって四半世紀後の現在の中学校がいかに変貌したかを見ることが私の個人的なテーマでもあったのですが、今回の体験は良い意味で驚かされることの連続でした。8時15分の朝礼からはじまり、1校時の国語、3校時の総合学習、4校時、給食をはさんで、5校時、6校時の国語、そして清掃から帰りの会まで一通りの流れを見学させていただきました。

国語の授業内容はヘッセ「少年の日の思い出」、芭蕉「奥の細道」、文法でしたが、まず全体の印象として、私の時代よりも授業が非常に作りこまれている印象を受けました。発問もよく練られており、一つ一つ丁寧に確認の手順を踏みながら、生徒に自分がいま何をやっているのかを常に意識させることに力点を置いていることがよくわかりました。前年から導入したという「読書生活デザインノート」を授業と連動させて用いていることも新しい試みとして目につきました。教室で学んだことを生徒各々の読書習慣に結び付け、国語力を滋養するための優れた方法と感じました。

学校行事の立て込んだお忙しい中を親切丁寧に対応してくださった国語科の冨高先生をはじめ、全てのお世話になった先生方に心よりお礼申し上げ、ここで学んだ成果を必ずや私の教育学部教員としての仕事にフィードバックさせることをお約束したいと思います。

社会文化教育講座　岡松　　恵

初任者研修として附属特別支援学校を見学させていただきました。訪問日は10月17日に開かれた「きりの子まつり」のリハーサル日にあたり、教室での様子と、体育館での舞台発表とを見学することが出来ました。教育現場を知る経験の少ない私にとって、先生方にとってはごく当たり前の事も珍しく、大変有意義な機会となりました。

当日はまず職員会議に参加しました。職員室は小中高で一緒で、それぞれが机の島に分かれるレイアウトでした。先生方はきびきびと寸暇を惜しんで必要事項を報告され、エネルギッシュな様子に身が引き締まりました。次に校長先生にご一緒させていただき、朝のお迎えに。玄関は小中高でそれぞれ別にあり、各玄関で先生方が子供を迎え入れます。小学校では児童は、自分の下駄箱に靴を入れると、先生に除菌スプレーを手にかけてもらっていました。「おまじない」とのことで、大変うれしそうでした。挨拶をするまでが長い子が多く、その分、コミュニケーションをとる時間が

十分にあり、お客の私にも一人一人が興味を持って接してくれました。

きりの子まつりは小中高で出し物があり、小学生は、子供たちがミッションをクリアーしていく毎にあおむしが成長する「きりの子あおむし」でした。中学生は、新人料理人にうどん店が協力してメニュー開発する「う～どんなUDON？」。高校生の「武田きりの子太鼓」は、22人が和太鼓を打ち鳴らす、伝統と迫力あるステージでした。

研修を通して、先生方の暖かい接し方を拝見し、大変勉強になりました。「じっくり腰を据えて」という言葉が浮かびました。朝の会議は迅速にしておられたのに、そこから一旦スローダウンして生徒を迎えられるのです。

また私が被服の教員ということで、先生方からは、きりの子まつりの衣装について感想を求められました。先生方が製作された衣装のレベルの高さに感銘を受けると同時に、教員を目指す学生の被服製作技術を高める必要性を痛感しました。学生に、じっくりと接しながらもより多くを教える事、これが今後の課題となりました。

最後にこのような機会を与えてくださった附属特別支援学校の先生方ならびにＦＤ委員会の諸先生に心より感謝申し上げます。

科学文化教育講座　佐藤　寛之

平成26年12月16日（火）に、附属幼稚園において新任研修の機会に恵まれました。幼稚園での参観は,息子たちが通った幼稚園での私的な参観を除けば、以前の勤務校に併設されていた東京学芸大学附属幼稚園竹早園舎での参観以来でしたので久しぶりではありましたが、打合せの際に荻原副園長先生より竹早園舎の先生方や前任の佐賀大学に設置されていた附属幼稚園の副園長先生等との話をお伺いすることができ、色々なところで繋がっているのだなと改めて実感しました。

研修当日は平素の教育活動に加えて、エストニアから本学教職大学院に留学中の先生によるクッキー作りや12月生まれの園児の誕生会等の活動が予定されており、それらの活動に楽しそうに参加している子どもの元気で微笑ましい姿からは、附属幼稚園の先生方の指導・支援の方向性を理解する手立てを得ることができました。

附属幼稚園には、観察池やウサギ・金魚・ザリガニの飼育等の子どもが身近な自然（環境）を考える契機を与える工夫が凝らされおり、副園長先生とその活動の意味や意義をお話しさせていただくことができたことも、私には貴重な経験でした。また、３歳児が実験と称して自分の考え（「石を水にとかす」）を試してみたり、自分が育てているテントウムシとその餌（葉）を見せて説明してくれたりするなど、改めて園児たちが何に関心を示しているのかを知る良い機会ともなりました。子どもの考えから導かれる行為を、幼稚園の先生方が子どもの話をしっかりと受けとめながら見守り支援する姿からは、子どもの科学的な思考の萌芽を見取る視点を得ることができました。

最後になりましたが、この研修の機会を与えていただきました加藤園長先生をはじめとした附属幼稚園の教職員の皆様や学部ＦＤ委員会の皆様に御礼を申し上げるとともに、新任研修で学ばせていただきましたことを、今後の教育・研究活動に活かしていきたいと考えております。

教育実践創成講座　一瀬　孝仁

私は、昨年度まで小学校現場に勤務をしていましたので、学級担任として自学級の子どもたちをどう育てていくか、あるいは学校の教師集団をどのようにまとめていくかという立場で日々過ごしていました。

しかし、今年度から教職大学院への勤務となり、言わば“転職”同様の環境下。附属小学校における新任教員としての初任者研修は，今までとは違った視点で学校を見直すことができたと思います。附属小学校は教職大学院の連携協力校でもあるので、院生の実習指導とも兼ね、年間25回（半日×25回）を附属小学校で過ごしました。

主に第４学年の一クラスの授業を中心に、学年・学級経営や日々の授業実践を継続的に参観することができたことは大変有意義でした。今までは授業をする側,提供する側であったのですが、授業を観る側という立場からの視点をもつことで多くのことを学ぶことができました。院生と共に丁寧に授業を分析していきながら、教材の新たな見方や授業展開の仕方、教師の発問や子どものつぶやきや発言の解釈・・・継続的に学校を訪問したからこそ分かること、感じることは多かったと思います。

附属学校の使命は、「研究」と「教育実習」です。初等教育研究会での先生方の公開授業や学部実習生が真摯に学ぶ姿、また、連合音楽会（第４学年の市内行事）などの行事への取り組みなどを参観することで、改めて附属学校への理解を深めることができました。そして、この一年間の研修を通して、大学教員としての使命はもちろん、自分にできること、しなくてはいけないことを新たに認識することができたことは大きな成果だったと思います。

このような貴重な機会を与えてくださったＦＤ委員会、また、快く研修の場を提供してくださった附属小学校の先生方に心より御礼申し上げます。ありがとうございました。

ＦＤ研修報告「第21回大学教育研究フォーラム」に参加して　副委員長　村松　俊夫

基調講演（佐藤邦明氏）

ポスターセッション会場

去る３月13日（金）・14日（土）、京都大学吉田キャンパスでおこなわれた「第21回大学教育研究フォーラム」に参加してきました。本委員会は昨年まで大学コンソーシアム京都主催の「ＦＤフォーラム」に出席してきましたが、より幅広い領域からＦＤの情報を収集しようと、今回はじめてこのフォーラムに参加しました。メインのパネルディスカッションをはじめ、２日間でポスターセッション35件、小講演８件、口頭発表76件（19部会）、参加者691名という大規模なフォーラムでした。

口頭発表では第６部会に出席し、「学生参加型ＦＤ・教育改善をめぐる論点」「学生も参画するＦＤシステム」等、学生と協働でおこなうＦＤ活動の報告を聞きました。他大学、特に私学では学生も巻き込んだＦＤ活動の構築が模索されているようです。

小講演では、「パフォーマンス評価とルーブリックの基礎と最前線（石井英真先生：京都大学）」を拝聴しました。「ルーブリック」とは、子どもの学習到達状況を客観的に評価するための評価基準表のことで、「パフォーマンス評価」とは、学習者の振る舞いや作品（パフォーマンス）を手がかりに、概念理解の深さや知識・技能の総合的な活用力を評価する方法とされています。講演では、「パフォーマンス評価」のもともとの目的が脇におかれ、「ルーブリック」が単なる分析的準定の手法として一人歩きしている現状が問題視され、こちらもうなずかされる点が多くありました。

第６部会　会場風景

小講演会場風景（石井英正先生）

メインのシンポジウムでは、まず「グローバル時代における大学教育の国際化を考える（佐藤邦明氏：文部科学省国際企画専門官）」と題する基調講演がありました。その後の氏も交えた４名のパネリストによるパネルディスカッションでは、日本の多くの大学が「教育の国際化対応」や「世界的に活躍できる人材の育成」に喫緊の課題として取り組み始めている一方、海外留学を志す学生が減少し「若者の内向き化」が指摘されました。国際化をめざすには、「たとえどんなに短期でもさまざまな機会をとらえて海外学習を体験させるメニューを用意することが重要である」という提言に共感しました。

また、某公共放送の法律バラエティ番組を模し、ＦＤ活動における悩みを持った相談者（大学教員）に対して相談員（授業改善実践者）がそれぞれの事例を用いながらアドバイスする「ＦＤ笑百科」というコーナーもあり、関西ならではの工夫も感じられたフォーラムでした。

教育人間科学部FD研修会「反転授業を考える」　FD委員会委員長　岩永　正史

2015年２月18日、最近、話題に上ることが多い「反転授業」について考える研修会を行った。「反転授業」とは、授業と授業外での学習内容を「反転」させ、授業前に理論や知識習得を行い、授業ではその確認や　課題解決を行う形態の授業のことである。

最近、反転授業は、大学の授業改革の一つとして取り上げられている（たとえば、朝日新聞2014年１月17日）。山梨大学でも、工学部の一部授業で反転授業が行われ、新聞で報道されている（朝日新聞2014年９月10日）ほか、外部講師も招いた研究会が開催されている（2014年９月24日、2015年３月３日）。こうした流れを受け、広い分野にわたり、多様な授業が開講される教育人間科学部において、反転授業の有効性を考え合うのが、この会のねらいである。

研修会の中心は、芸術身体教育コース・新野貴則先生の実践報告であった。新野先生の実践は、図画工作科内容論の一部に反転授業を取り入れたもので、予習教材の作成法も含めた報告には、「反転授業のハードルが下がった」との感想があった。

一方、「知識習得→応用」というステップを踏まない授業、たとえば、「多様な意見を出すこと自体が目的の授業には不向き」との指摘があったり、「新たな知識や理論を獲得する場面こそ、受講者の既有の知識や概念と関わりをふまえながら、「反転」させずにやるべき」といった意見も出された。

今後は、大学授業の改革という観点ばかりでなく、小中学校への反転授業導入の是非も視野に入れながら、検討していくことを確認して会を閉じた。